わたしの聖戦（ジ・ハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 1

医学ジャーナリスト　植田美津江

「観光ガイド」という仕事

ドイツの首都ベルリンを訪れたのは、秋も深まる10月の下旬、厚い雲がどんよりと迫ってくるような季節だった。仕事の合間に慌（あわただ）しい市内観光を果たすため、同行した日本人らとともに2台のバスに乗り込んだ。それぞれに若いドイツ人女性のガイドが付いていた。

「オハヨーゴザイマス！」、元気に日本語挨拶をする彼女らに「あぁ、ここでも」との思いがわきあがる。彼女たちのような観光ガイドの日本語のうまさにはいつも驚いてしまう。

とにかくどこに行ってもいるのである、日本語を上手に操る人々が。時には今や我々の誰もが使わないような敬語を織り交ぜて話をされることもあり、思わず襟を正してしまう。チベットしかり、ベトナムしかり、旧ソ連しかり、北朝鮮しかり……。

海外の飛行場を降りると、出口にツアー名や個人名の旗を掲げた観光ガイドらがひしめき合うようにして立っているのをご覧になった方もあるだろう。落ちぶれたとはいえ、いまだ世界の金満国ニッポン、日本人旅行者を対象にした観光ガイドをあちこちで目にする機会はまだまだ多い。

なかに、一度も日本を訪れたことのない人もある。聞けばラジオの日本語講座や自国の養成学校に通って日本語さえまなびたのだという。ラジオの基礎英語ができるといわれるが、情報が限られた状態にあって彼らの努力は並みたいていのものではないなと唸（うな）ってしまうことも一度ではない。

また、日本の大学に留学した経験を持つ人もある。ベルリンのふたりの女性らがそうだった。ドイツの大学卒業後に日本の大学に留学し、2年前後にわたって日本語を学んだのだという。ふたりのうちひとりは神奈川、もうひとりは北海道登別に滞在した経験を持っていた。「日本の温泉素晴らしい！」との彼女たちの発言に、我ら日本人も悪い気はしない。日本について考えてみたひるがえって日本の物価の高さは世界一有名である。風光明媚（び）な土地柄でありながら、海外から見れば「行きにくい国」になってしまっているのだ。2001年の日本人海外旅行者が1、782万人であったのに比べ、日本を訪れる外国人数は477万人と約4分の1に留まっている（旅行統計2002年）。外国人旅行者受入数が国際的には33位という数字も外国人旅行者にとっては敷居の高い国となっていることを表している。

外国人向け観光ガイドになるためには、国土交通大臣の実施する試験に合格し、都道府県知事の免許を受けることが必要である。2001年の実施状況は、一番受験者の多い英語でも受験者4、072名、合格者222名で、最も少ないのはイタリア語の受験者52名、合格者わずか2名であった。語学力のみならず日本の文化や歴史にも通じていることが望まれる極めて難しい、しかしやりがいもあるはずの観光ガイドだが、日本の実態は甚だ心もとない。

楽しげにドイツを語る女性ガイドの日本語を聞きながら、観光ガイドという職種への認識度の低さは、そのまま日本の職業に対する固定観念や狭い価値観にとらわれている現状を表しているのではないかと、つくづく感じ入るのであった。

（愛知診断技術振興財団理事・研究所長）

タイトル・浅井健史

筆者略歴

福岡県生。名古屋市立大学病院勤務（看護師）を経て、愛知県立総合看護学院保健学科卒業。名城大学法学部卒業後、東洋英和女学院大学大学院修了。現在、愛知医科大学医学部大学院研究生、㈶愛知診断技術振興財団理事、㈶愛知県肺癌対策協会理事ほか役職多数。近著に『6人のケアマネージャーと介護保険』『健康感』がある。